

イワサキセダカヘビ

去年西表島で初めてガイドをお願いした堀井さんは、生き物探しのプロだ。去年は日本最難関のカエル、コガタハナサキガエルを見つけてくれて歓喜した（Vol.150参照）。今年は何をリクエストしよう…。西表島には「3珍」と呼ばれる、見るのがとてもとても難しいヘビがいる。イワサキワモンベニヘビ（幻級）、ヤエヤマタカチホ（超ムズ）、イワサキセダカヘビ（激ムズ）だ。無理だと言われるのは百も承知で堀井さんに尋ねてみたところ、「セダカなら可能性はあります」と返事をもらった。鼻で笑われるのも覚悟していたので、これはとても嬉しかった。ただし、「一晩で見つけるのは非常に難しいですからね」と念を押された。去年のコガタハナサキより難易度がだいぶ高くなるだろう。

当日、「仮に見つからなくても、どういう場所にいるのか教えてください」と言われる。それを聞いて、ああこの感じは**本当に見つかる可能性が低いんだ**と思ひ知る。堀井さんは物凄く丁寧に、セダカが好む地形や植生、時間帯、見つかった時の状況などを教えてくれた。いったいどれだけの観察を経験すれば、こんな珍しい生物の生息環境をそこまで詳しく知り得るのだろうか…。「毎晩歩き回ってますからね」とこともなげに返された。おかげで、少しだがセダカが出没する状況が分かってきた。堀井さんのヒントを頼りに全員で必死にセダカを探し回った。

最初のポイントでは見つからず、移動。次のポイントに賭ける。だが、そこでも全く見つからなかった。**すでに3時間経過**。みんな汗だく。メガネも湿気で曇る。「少し先にもポイントがあるけど、どうしますか？」亜熱帯の蒸し暑い夜の森、ただでさえ体力が削られるのに、ターゲットが全く見つからない時間は精神的にもきつい。一般人ならとくに集中が切れてる（というかまず探そうとも思わないか）。みんなの顔を伺ってみたら、やめたいと言い出す者は一人もいなかった。むしろ「そりゃ行くでしょ」といった感じだ。去年も思ったが、みんながこういう心持ちでいてくれるから、このハードな生物探しを研修プログラムに入れてあげたくなる。**プロと一緒にガチの生物探し**なんてそうそう経験できない。

さて、最後のチャンスだ。ここで見つからなきゃ終了。焦りを感じる中、真っ暗な森を進む。ふと、堀井さんが見ていない側のシダの葉に目が行った。「ちょっと気になって見てみた」というレベルのチラ見だった。たまたま横にいたヒビキも全く同じタイミングで同じ場所の**“違和感”**に気づいた。**違和感の正体…**茶色の葉っぱか？いやこれは……**ヘビだ！！「いたあああー！！」**思わずヒビキと叫んだ。まだ小さい幼蛇だったが、紛れもなく激レアヘビ、イワサキセダカヘビだ！終了間際に見つかるなんて、こんな**テレビ番組みたいな展開**ある？！珍しい生物を探すのは大変だが、見つけた時のアドレナリンもすごい。疲れも吹っ飛んだ。

この日の最後に堀井さんに「よくセダカ探しを引き受けてくれましたね」と聞いてみた。「佐藤先生の情熱を知って承諾しました」とのこと。嬉しいなあ。出発前、セダカの研究に関する本や論文を読み込み、いかに面白い生態か、いかに探すのが難しいか、事前学習会でみんなに熱弁した。わざわざ生物の宝庫に行くのならば、「**本気の”生物探し”**」を体験させたかった。でもまさか本当に見つかるとは思わなかったなあ。宿舎に戻った後も、この日は興奮してなかなか寝付けなかった（注・まだ西表島初日）。

参考：細特貴, 2009, 右利きのヘビ仮説: 進むヘビ、逃げるカタツムリの右と左の共進化, 東海大学出版会



サイズ感 かなり小さい、幼蛇だった。

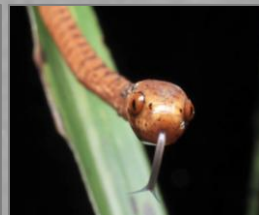


3珍ヘビの一角・イワサキセダカヘビ（幼蛇） *Pareas iwasakii* 7月26日
樹上でカタツムリのみを食べる。八重山3珍のうちの一種で、滅多に見つからない。日本にセダカヘビ科はこの種のみで、西表島と石垣島のみに生息。カタツムリの渦巻き状の殻に適応した結果、左右の歯が非相性になり、右巻きのヘビを専門に食べることに特化した（右利きのヘビ仮説）。結果、カタツムリは左巻きのものの方が生存率が上がり、セダカヘビの分布域では他地域と比べて左巻きのカタツムリが多いそうだ。ヘビとカタツムリの進化のせめぎ合い…面白すぎる！



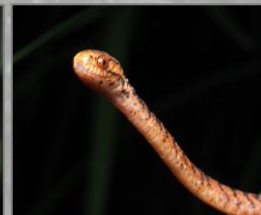
搜索開始前

探し方や安全対策等、レクチャーを受けてから森へ入る。



横に突き出た目

セダカヘビはかなり特徴的な顔をしている。頭に対して目が大きい。



横顔

鼻先が短く、口は笑っているかのよう。虹彩はオレンジ色で瞳孔は縦長。



みんなで写真撮影

探すのに苦労した分、見つけた時の嬉しさは倍増だ。